



第 40 回 - 生駒山地を巡る 2)ニギハヤシと物部-

河内磐船神社、石切劔箭神社などについて前回報告したが、平行して文献を徒渉した結果、ニギハヤシと物部について遊びの余地を見いだしたのでここに報告する。日本書紀は、イワレヒコ（神武）東遷以前、すでにニギハヤヒがいづこからともなく、ヤマトに舞い下りていたと記している。イワレヒコは、「東にある美しい国に天の磐船に乗って飛び下りたものがすでにいて、その名をニギハヤヒというらしい」と云う塩土老翁の情報を聞き、「私もかの地に行ってみたい」と決めた。説話の解釈はさておき、2世紀後半、中国と朝鮮半島がおおいに乱れ、倭国もまた乱れたと記録にあるが、その頃、ニギハヤシと彼を奉斎する一族（物部氏）は東に移動し、畿内に一つの国を建てたのではないかと思われる。その後、日本書紀によれば4世紀初頭にもう一度、九州からイワレヒコの東方への移動即ち神武東征が行われた。この二つの東遷について、ニギハヤシの「先代旧事本記」の記述と神武東遷についての「日本書紀」の話を比べてみると、ニギハヤヒのほうが遙かに具体性があり、イワレヒコの日本書紀の記述は大ざっぱであることが多いと指摘されている。

まず、ニギハヤシとイワレヒコは同族であること、即ち、同じ天羽羽矢（あまのははや）と歩輶（かちゆき）を天神の子であることの徴として所有していたと「日本書紀」は述べている。「日本書紀」が天皇家と物部氏を同等と記録せざるを得なかったことは重要である。ニギハヤヒが天降ったときに乗って来たという天磐船（堅牢な準構造船）の船長、梶取から船子の名前まで「旧事本記」に記されている。船長は跡部首、梶取は阿刀造で、彼らはのちに大和盆地と難波を結ぶ重要な古代交通路である大和川の水運業に携わる一族となった。この東遷は大船団であったと想定され、造船や船の修理に長けていた為奈部等祖と水手や兵士たちがかぶる菅笠のために笠縫等祖も加わっている。物部集団の32名の幹部とその子孫名が列挙され、主なものを紹介すると天香語山命（尾張連等祖）、天太玉命（忌部首等祖）、天糠戸命（鏡作連等祖）、天造日女命（阿曇連等祖）、天背男命（尾張中島海部直等祖）、天三降命（豊国宇佐国造等祖）、天日神命（対馬県主等祖）、天月神命（壱岐県主等祖）などである。さらに、天降りに供した五部の人として物部造等祖の天津麻良や筑紫弦田物部等祖の天津赤星など、別の五部造として二田造や大庭造（いずれものちに和泉の豪族となる）など、また兵仗を帯した武力集団とみられる二田物部、当麻物部、鳥見物部、赤間物部、筑紫物部、筑紫贄物部ら二十五部があがっている。ここでいう「部」とは高句麗や百済で使われた小集団の単位であろう。この東遷は家族を含めた大集団の計画的移住であり、金属精錬、造船、鏡作り、笠作りなど様々な技術を持った人たちも加わっていた。

ニギハヤシの降臨・東遷に同行したという面々の名前を見ると、壱岐・対馬から始まり、筑紫・豊と河内・大和・摂津・和泉にまたがる物部氏の同族が多いことが特徴である。東遷は単発的ではなく、1・2世紀の早くから一族の交流があり、物部氏の東遷という史実は時間を掛けて行われたものと考えられる。物部氏の出身・出発点は北九州と考えられていたが、関祐二氏は「物部氏の正体」で「物部は吉備である」というユニークな指摘を行った。物部氏は東遷に当たって、関門海峡や、来島海峡とその以北の島々、瀬戸内海東部の海峡部分に拠点を設けることに注力した。つまり、「瀬戸内海の制海権」の確保と「瀬戸内海王国」の設立を目的としていたと考えられるという。そのことはさて置き、生駒山を目標として船を進めたニギハヤヒ一行は、まず生駒山塊北半分の西方に広がる河内平野に勢力を築いた。ここには、ニギハヤヒを祀る石切劔箭神社、矢作神社、弓削神社、跡部神社など古い神社が多い。次ぎに移ったのは桜井市の南東にある鳥見山麓の鳥見白庭台である。ここに勢力を張っていたナガスネ彦と婚姻を結び、ナガスネ彦がニギハヤヒを君主と仰いだ結果、本拠地である鳥見（外山）の地に移ったのである。鳥見はヤマトの中心部東南の角にあたり、東からの街道が大和平野に出る地点で、磐余の東隣である。

話は変わるが、弥生の終末期から古墳前期にかけて、ヤマト中心部の巻向川流域にとつぜん大集落（纏向遺跡）が形成された。この纏向遺跡の規模は、広さ東西2キロ×南北1.5キロで、のちの藤原京や平城京と遜色ない広さであった。しかも、農耕の痕跡が全くない宗教と政治のみの都市が誕生したのである。この出土品の特徴は、外来系の土器が多いということ、多い順では東海（49%）、山陰・北陸（17%）、河内（10%）、吉備（7%）、関東（5%）、近江（5%）、西部瀬戸内（3%）、播磨（3%）、紀伊（1%）である。当時の各地の王が纏向の構想に協力したことを伺わせるものがある。気になるのは土器が遺跡に集まった順番であるが、まず吉備、次に山陰であったことは、ニギハヤヒと共に吉備と出雲が主導的役割を果たしたことを窺わせる。九州からの土器は全くなかった訳ではないが、統計的には無視できる程度であった。むしろ、纏向遺跡の前半を彩る庄内式土器が北部九州の沿岸部に伝播しており、「ベクトル」はヤマトが北部九州を纏向に誘っている様に見える。また、纏向では3世紀前半に前方後円墳の原型が完成し、この「纏

向型前方後円墳」という新たな埋葬文化が、庄内式土器とほぼ同じ地域に伝播し首長層に採用されている。この古墳原型の形成については吉備の影響が強いという。

日本書紀によれば、神武東征前にヤマトに外部から舞い降りたのは、出雲神・大物主神が第1号、物部氏の祖ニギハヤヒが第2号であり、これに土着のナガスネ彦を加えると、状況は纏向から出土した物証と符合するのである。ヤマト土着のナガスネ彦等の勢力は微弱であって、多地域の人や文物が集まって初めてヤマトが建国にむかったと考えられる。環濠などの防御施設を全く持たない平和都市纏向とは一体何だったのか？倭国大乱で相争うことに疲れた諸王が平和を話し合うために作った古代の国連のようなものかもしれない。

そこで、ヤマト建国の仕上げとされる神武東征だが、日本書紀の東征の記録は極めて疑わしいのである。前に述べたニギハヤヒの記録と比較するとよく分かるのだが、1) 船とそれに乗る人の記述に具体性がない、2) 東遷の道筋と所要年数に不可解な点がある、3) 供として数名の名が出ているだけで具体性に欠ける、4) 神武(イワレヒコ)を祀る古い神社はない、5) 河内平野については記紀の編纂に近い時代の地形を骨組みに話が作られている(森浩一氏)、等の点である。何よりも当時物部氏がすでに要所を押さえていた瀬戸内海を、物部の了解無しに航海ができたかどうかが問題であろう。なによりも、纏向遺跡はヤマト発足当時には戦いは無かったことを示しているのである。

天皇家の先祖は纏向に集まった諸王により、逼塞していた南九州から共立するために迎え入れられたのではなかろうか？ニギハヤヒが何の抵抗もなく、すべてをイワレヒコに譲り渡したという「日本書紀」の記述には胡散臭い節がある。物部は戦えば勝てたのであり、恭順したという理由は明白ではない。また、熊野でニギハヤシの息子タカクラジ(天香語山命)が天神から授かった名剣・節霊でイワレヒコを助けた話、椎根津彦が夢のお告げに基づいて天香具山の赤土を取って平瓦をつくり、天神地祇を祀って強敵を打ち払った話などは唐突で出来過ぎであると思う。物部氏の祭祀を天皇家が踏襲するという条件で王権の委譲があったという説も有力というが、ニギハヤヒとイワレヒコが同族であるとするれば当然祭祀も同様であるはずであり、物部氏が天皇家の祭祀を執り行ったとしても不思議ではない。ニギハヤヒ或いは物部氏は諸王の合議に基づき、イワレヒコを共立するために迎え入れるべくして迎え入れ、そして物部氏の力は保たれたのであろうと思われる。

ニギハヤシは倭大國魂として祀られることとなり、ヤマト宮廷内で祀られていたのは天照大神と倭大國魂である。このことは、伊勢神宮と大和神社についての史実として明らかである。倭大國魂＝大物主神であると言う混同を見かけることがあり、神話に登場する主人公が入れ替わったりしていることもあるが、後世の誤りであろう、これは出雲と物部の関係を考えるならばあり得ないことである。そして物部氏はヤマト朝廷組織内では内物部として厚遇され、また初期の皇后の出自は物部系が多かった。

さて、ニギハヤシの息子たち、ウマシマジ(宇摩志麻治命)と異母兄タカクラジ(天香語山命)がヤマト朝廷から左遷されたと言う話がある。この二人は兵を率いて遠征に出て、尾張、美濃、越(北陸)を平定したのち、タカクラジは越に止まり開拓にいそしんで、弥彦神社(新潟県西蒲原郡)に祀られている。一方ウマシマジは越から転進し、播磨、丹波を経て、出雲の西隣の石見国に到り、鶴舞山で国見をし、その麓に住まいを定めたという。それが石見国一の宮の物部神社である。この時期における物部氏の最大の関心事はできたヤマト政権をお守りすることではなく、出雲勢力圏の東西両端を押さえて、出雲と日本海から通ずる新羅を監視し、瀬戸内海の制海権と勢力圏を安泰とすることであった。忘れてはならないのは丹後であり、石見と越の中心点であるこの重要な地に、ニギハヤシは国系系図の海部氏祖先という布石も打って、対出雲監視網を万全なものとしている。

一方、いわゆる外物部は東海地方への進出を図り、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆の国造はいずれも物部氏の流れを汲み、ヤマト朝廷から派遣されたとは言い切れない性格を持っていた。物部氏は日本各地に広大な土地と民を所有し、それを権力の基盤としていた。守屋の滅亡によってもその大勢は変わらず、物部氏が権力の座から転落するのは、土地と民を手放す公地公民の「大宝律令」が整備され、平城京に遷都する頃であった。

(岡野 実)

《写真の使用掲載をご許可頂いた吉本吉彦氏に感謝いたします。》

- 文献 1) 敗者の古代史 森浩一 中経出版 (2013)
2) 神社が語る、古代12氏族の正体 関 裕二 祥伝社(2014)



●写真：物部神社